

ブラッドフィールド (C/2004F4) 彗星の撮影成功！

奥村茂実 (Shigemi OKUMURA)

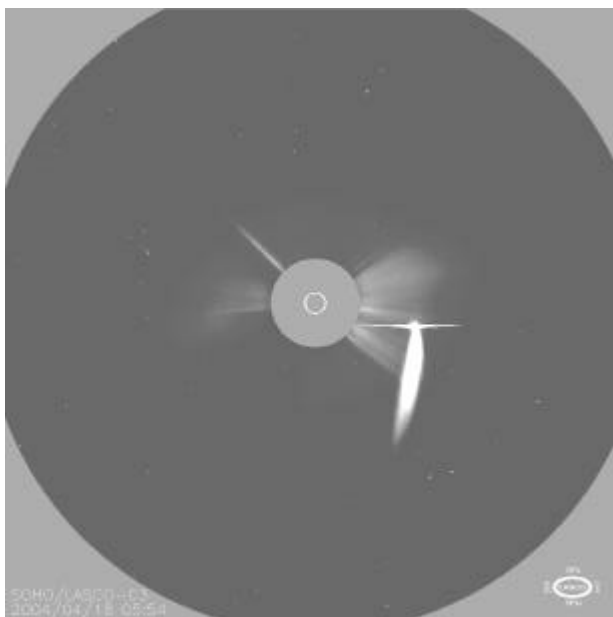
今年には彗星の当たり年となった。

LINEAR (C/2002T₇) と NEAT (C/2001Q₄) の夕空での競演が期待され、多くの天文ファンが手ぐすねひいて二大彗星の観測準備をしていた頃、オーストラリアから肉眼彗星の発見報がとどいた。

発見者はオーストラリアのベテラン彗星観測家ブラッドフィールド (William A. Bradfield) さん。

早速「ブラッドフィールド彗星」C/2004F₄ と仮符号がつけられた。

3月28日(世界時)「くじら座」に眼視で彗星を発見したそのときの明るさは8等星で、暫定軌道要素による位置推算(IAUC 8320)では、4月17日に1.9等に達すると計算された。70年代活躍されたブラッドフィールドさんも今や77歳。この老人が、南半球で言えば秋から夏に変わる頃の日没時の発見だったと言うが、寒い北風、いや南風の吹きすさぶ中での発見は、その歳を一向に感じさせない、若者顔負けの偉業だといえる。



SOHO の画像から：2004/4/18 0554(UT)

今回発見された彗星は、ご自身 1995 年ブラッドフィールド彗星(C/1995 Q₁)以来、9年ぶり 18 個目の彗星発見となるようだ。

その後、予測どおり太陽に非常に接近し、SOHO の画像にも、近日点を通過中の彗星の姿が、ダイナミックに捉えられた。

そして、明け方の東の空に見られるようになり、4月20日頃から、我々の観測ポイントに入ってきたので、早速のぞいてみることにした。

4月29日の朝、この日は高冷地で霜の降りた寒い朝になったので、クリアな空にめぐり合えることが出来た。

2時ころ栗矢観測所に向かい、早速、スライディンググループを開けたのだが、東側の樹木が大きくなって視界をさえぎる可能性もあったので、観測所での写真撮影はあきらめ、西の小高い民家の近くの農道の上で望遠鏡を組み立てることにした。

近くの民家では、遅霜対策のためランタンをともし、懸命に果樹園の温度管理をする中での写真撮影であったので、いささか気がひける思いだった。

3時20分頃、ブラッドフィールド彗星はアンドロメダ座 星の東に位置していて、南アルプスから「淡いダストの尾」を先頭にその姿を見せてくれた。核光度 3.5 等星。全光度は 2 等星はあろうか。近くに M31 があり、銀河と彗星を同時に見ることができたのは、「オースチン彗星」以来のことではなかったか。

ブラッドフィールド彗星は核のコンパクトな彗星で、ダストの尾はまっすぐと垂直にのびている。双眼鏡の視野からは、長さ 6 度と目測した。

近くにはタイバー彗星もあるはずであるが、こちらは暗くて見えない。

薄明が既に訪れているので露出は長くかけられなかったが、とりあえず 6 枚ほどの写真を撮影した。



2004/04/29 03:37 (JST) 露出 10分 135mm F3.5
栗矢観測所近くの農道にて

今回の彗星の特徴はその逃げ足の速いことだ。うっかりしているうちに、光度は急激に落ちてきて、5月の下旬には、肉眼の視界からは消えそうである。

この彗星は、いわゆる「バージンコメット」といわれる、かつて太陽に一度も接近していないもののグループに含まれるかもしれない。

クロイツ族との発表はないみたいだが、「池谷・関彗星」のような形状であったのが印象的だった。私は「池谷・関彗星」は見えていないので、これで尾が発達してくれれば、その様相が見られたのにと、少し残念にも感じている。

一方、かねてからの期待を寄せられている二大彗星についてであるが、LINEARの方は日本からはいったん見られなくなる。その後の光度上昇が期待される。また、NEATのは5月5日頃から、西の低空に見え始めている。

岡山天文台でも核から噴出するジェットが観測されていて、その変貌が期待される。

夕方の忙しい時間帯であるが、なんとか二つの彗星のランデブーに期待したい。

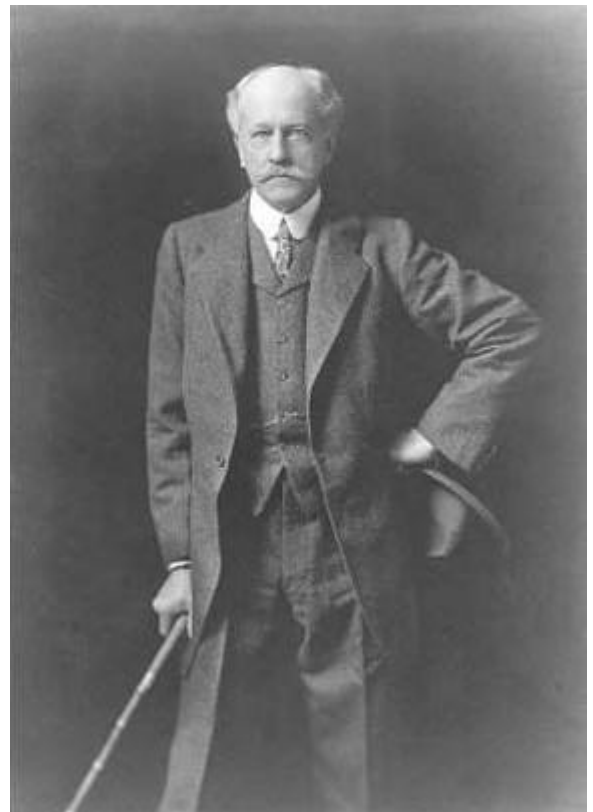
もし、同時に肉眼で見ることが出来れば1618年以来の珍しい出来事となるという。

彗星発見の分野では、NEAT、LINEARと地球近傍に接近する天体の早期検出プロジェクトによる発見

が際立って多くなってきているが、その中での眼視観測での発見は、まだまだ、アマチュアの観測者の活動範囲が残されていることを示すといえよう。

(2004/5/7)

穴水ローエル会議に参加



去る5月2日から5月4日まで、石川県穴水町で行われた「日本ローエル会議」に出席してきました。

以前調査した天竜下りとローエルとつながりを発表してきました。

今回の会議は、約40名の参加者で、海外からのゲストとして、Sky and Telescopeで有名なライターで精神科医、アマチュア天文家のウィリアム・シーハン氏(William Sheehan)が参加しました。彼は1954年生まれと、私と同じ年で、九州から参加した、福岡国際大学の浅田正先生も私と同じ年で、大いに話が盛り上がりしました。

詳細は後述として、今回の会議は、多くの友人との再会ができ、又新たな友人もできた有意義な会議でした。

会議場は金沢工業大学の学生用の研修施設「自然学苑」で、穴水町の南東に位置し、風光明媚な丘の上にあります。

5月2日は、和倉温泉より穴水までの間、会場を金沢工大の海洋演習船「アルタイル号」に乗って、ローエルが廻航した実際の海上路を検証しながらの船旅でした。
(奥村茂実)